

平成 22 年度(第 33 回) 校内放送指導者講習会 報告

神奈川県立横浜国際高等学校

畠山 純一

日時：平成 22(2010)年 12 月 26 日(土)【講座 1・2・3】、27 日(日)【講座 4・5】

会場：千代田放送会館 (東京都千代田区紀尾井町 1-1)

講座 1「顧問交流」(前半 90 分 後半 60 分)

全国からの参加者 120 人が 9～12 人程の 12 班に分かれて、主催者が提示した 3 つのテーマの一つについて、日頃の活動報告をしながら突っ込んだ話し合いと情報交換をした。

テーマを「素材の見つけ方」として、班の話し合いを進め、各高校の状況と悩み問題点を洗い出した。例として、校内ネタが校内で完結してしまう悩み・生徒と顧問の企画会議の時間を定期的に持って深め調べさる・取材して始めようとしたら対象物が撤去されてしまった等が挙げられた。

生徒の乗せ方・やる気の出させ方の方法論や工夫について話し合い、顧問が楽しむ・生徒との時間の共有・合宿や県主催の各種研修会への参加・生徒に自分の名刺持たせ取材先との折衝や連絡を担当させる・大会で他校の作品を良く見て自分たちで批評しあう等が提案された。

各班の記録を、講習会主催者が集約し PDF 原稿にして CD に焼き付けたものを配付してくれたので自分以外の班の話し合いの様子を知ることができた。

講座 2. 実践発表「北海道 10 年の試み」(60 分)

札幌日本大学高等学校 福田 幸一先生

10 年間継続している高校一年生徒と顧問を対象とした「放送技術講習会」について、運営側の苦勞や歴史に関して報告があった。3 月下旬に一泊二日で、定山溪温泉のホテルを利用し宿泊で実施されている。120 名参加している生徒対象でアナウンス・朗読、ラジオ制作、テレビ制作について地元のプロを講師に迎え最後に発表会と表彰を行う。40 名参加している指導者研修会はプロの指導を受けながら顧問間の交流・ネットワーク作りが目的で、回を重ねて組織作りも進んだ。

講座 3. 番組講習「放送部の理念と基礎知識 ～映像制作活動を通じた人間教育をめざして～」(90 分)

東京情報大学総合情報学部情報文化学科 伊藤 敏朗教授

「夢をみてプログラムして実行する」(アスキー創業者・西和彦)が、映像制作実践から学んだ番組制作の究極の目標と言える。テレビ番組制作で高校生に欠けているのが「3 点照明(キー・フィル・タッチ)」で、見えるべきものを自然に見せる技術に繋がる。さらに、ドキュメンタリー番組に求められる 3 つのポイントは「正確、テーマ(哲学)、感動」があることで、構成の技術では、「串団子型(番組の時間は一方向だけに流れる表現方法)構造」になることを意識しておく必要がある。

伊藤教授はネパール政府に招かれ現地で映画制作を指導し、「カタブタリ～風の村の伝説～」08 年度ネパール政府国家映画賞と映文連アワード 2009 パーソナルコミュニケーション部門奨励賞を受賞し精力的に現在も映画制作指導に当たっている。

講座 4. 「読みの基本と指導法 模擬審査」(160 分)

NHK放送研修センター日本語センター 榊 寿之 特別専門員

「意味読み」の実際と指導法を示した後、NHK杯のCDを聞き全員で模擬審査し、得点を集計し会場平均点や講師の得点、審査のポイント実践的に教授した。

参加者の中から2名が模擬読みの実験台になり、読みの基本ポイントを提示した。①聞き手が呑み込み理解できる「間」を取る。②語尾は伸ばさない、強く読まない。③4～5mくらい向こうにいる人に伝えるように読む。④接続詞の下には転換なので「間」が必要。⑤会話文の表現は「地」の文の指示に従い、演技にならないようにする。⑥イントネーションは、話している時の形が理想。⑦単調な読みにならないように「メリハリ」をつけ、「組み立て」をし、「意味のたまり」で読む。⑧漢字が意味の中心なので助詞は弱めに読む。⑨一音目を大切に作る。⑩唇だけで音を作らず、息で声を作る。

全国大会出場者の模擬審査では、アナウンスでは、「単語名詞一つ一つきちんとアクセントチェック・大切なところを「力」入れて声を出す」、朗読では、「文末にまで心が入っていることが大切・文末を投げ出さずに読む」ことなど、実践的な指導や評価について講義があった。

講座 5. 「番組技術と模擬審査」(180 分)

NHK制作局第一制作センター 青少年・教育番組部 足立 圭介 専任ディレクター

企画書作成の過程を示しながら、台本制作・撮影・編集のポイントを講義し、NHK杯のラジオ番組作品を聞き全員で模擬審査し、得点を集計し会場平均点や講師の得点、審査のポイント実践的に教授した。

台本制作は、ドラマではプロット(構成)を作って膨らませ台本にし、それから絵を考えて行くのに対し、ドキュメンタリーは何が撮れるかを考えてコメントは最後に作る。番組構成のポイントは「テレビもラジオもリニアなメディア」であると言うことを頭に入れておき、作品の冒頭で理解できるようにしないと、全てがわからなくなって受け手が離れてしまうことを理解しておく。また、撮影のポイントは、現代は映る人の時代ではなく撮る人の時代になり、「意味のある絵を撮る」ことが求められている。テレビの作品で重要なのは実は「音声」である。音さえあれば番組は成立し、人はノイズ(時間や様子)を聞こうとする傾向があるので音声から情報を提供することを意識するべき。編集に関しては、台本通りに進まず編集室で変化するものと考えた方がよい。番組の印象は冒頭で決まる(2～3分)ので、印象的面白い映像を掴みとして初めに持ってきたり、ナレーションではなく現場音から入るのも効果的。編集でカットつなぎに凝りすぎると印象が変わってしまうので、単純なつなぎを基本として効果が必要なときだけ利用する方がよい。作品は長目に編集して、不必要な場面や情報をカットしながら進める。

【参加しての感想】

これで、3回目のこの研修会への参加になるが、「自分の審査基準の妥当性」「顧問としての生徒への関わり方」「作品制作場面での指導・技能向上」等、毎回違った視点での自分磨きになっている。指導法や作品のネタ探しなど、手探りで進めることは無駄ではないが、ここでは理論体系化されている。同じ立場で生徒と共に格闘して作品を産み出している全国の顧問との大会会場以外での交歓は、この研修会ならではのと思う。初めて顧問になった人こそこの熱い研修会に参加することを勧める。